

太宰治論——「エロティシズム」の可能性

田 澤 久美子

一、はじめに

太宰作品の、とりわけ性の問題を考えるとき、論点は、肉体的・肉感的な問題より精神的な問題に向かわざるを得ないだろう。何故なら太宰治は、露骨な性行為の描写を作品に描くことがほとんどないからだ。太宰作品において、登場人物の恋愛感情から発展した性行為と、そこから得られた彼らのエクスタシーが、緻密に描かれることは、皆無であるといっても過言ではない。

しかし、太宰が性行為を描かないからといって、彼が性、特にエロティシズムの問題について、描くことが出来なかった作家であると過小評価するのは、短絡的思考であろう。逆に、直接性行為を描かないからこそ、人間社会に存在するエロティシズムの構造を抽象化することが可能となるかも知れない。また太宰の意図によらず、人間の行動や社会空間を描写するうちに、そこにエロティシズムの問題が内包されるということも起こり得る。何故ならエロティシズムの問題というのは、そもそも人間活動の根源的な問題であるからだ。それでは、太宰作品にどのようにその根

源的問題が隠蔽されているのかを探りながら、特に、『走れメロス』を中心に、再読を試みたい。

二、性行為と代替行為

文学作品において登場人物の性行為が描られるかどうかという問題と、その作品においてエロティシズムが描かれているかどうかという問題について考察したい。この二つのことは、一見切り離せない問題のように思われるが、エロティシズムの本質について考えてみると、実は全くとはいえないまでも異質の問題であり、性行為は、エロティシズムの成立に必ずしも関与するわけではないのである。それは、エロティシズムというものの本質が、肉体的な行為ではなく、あくまでも、人間が、人として進化していく中で築き上げられてきた、精神の内にあるということに起因している。

純粋な性的欲望による性行為を描くことは、動物を描くことに他ならない。『人間失格』においても、「無学な小男の商人」にヨシ子が凌辱される場面で、葉藏が「少しでも恋に似た感情でもあつたなら、自分の気持もかへつてたすかるかも知れませんが、ただ、夏の一夜、ヨシ子が信頼して、さうして、それつきり、」だと感じた性行為のことが、「電気がついたままで、二匹の動物がゐました」と、「動物」という言葉が使われて描写されているではないか。小説において意志の介在しない性行為は、エロティシズムの成立する対象たり得ないのである。

また、エロティシズムの概念というのは、もつと幅広いものである。端的に言えば、人間が何らかの強い意志を持って、自己の求める対象に心を動かし、それを得るために行動をするとき、まさにその瞬間エロティシズムは成立しているといえるし、また、その何らかの対象を得られたとき、その人間はエクスタシーを感じることであろう。そして、

私が考察したいのは、まさにその行動というものについてである。直接的にエロティシズムを描きたいのであれば、単純に性行為を描けばよい。恋愛という精神的選択を経てさえいれば、そこに人間的なエロティシズムは成立するだろう。

ところが、エロティシズムを間接的に描くことになったとき、人間のみならず、物や思想も含んだ拡大化した対象の描写だけでなく、性行為が変わる、対象を得るためのなんらかの別の行動、つまり代替行為が描写されなければならなくなる。また、その代替行為は、苦痛や犠牲の伴う行為であろう。何故なら、それは意志によって引き起こされる行動だということを、読み手に納得させる行動でなければならないからだ。なんらかの苦痛や犠牲を伴う行為は、強い意志が働いたがゆえの行動として理解しやすい。

文学作品で、セックスに匹敵する代替行為としては、まず、「死」が描かれる。⁽¹⁾ ジョルジュ・バタイユの「死」||「エロス」という思想を待たずとも、「死」(特に自殺や心中)と、「エロス」の問題を扱った文学作品は文学史において数多く存在している。太宰作品においても、男女の「心中」というのは、よく描かれるテーマである。ここで私は、「心中」から読み取れる「死」と「エロス」の関係性について考察したいわけではないので、詳しくは述べないが、先述した代替行為というのは、「死」(自殺)でなくとも、なんらかの思い切り、精神的衝動が必要な行為であれば、オールマイティに変換可能なはずである。

ここで、太宰作品に描かれているひとつの行為に注目したい。それは、「走る」という行為である。人間が日常的な空間で移動するのであれば、「歩く」という行動がとられる。それだけに、「走る」という行為は、特別な意味を持つといえる。人間が「走る」とき、そこは、非日常の空間となり、また、「走る」という行動をさせる対象(得たいもの、もしくは避けたいもの)が存在しているということでもある。そういった対象に対する意志が働かない限り、

人間は、時に苦痛さえも伴う「走る」という行為をはじめようとはしないだろう。

さて、特に「走る」という行為の描かれた太宰の作品を取り上げて、この行為が作品でどのような役割を果たしているのかを考察してみたい。『走れメロス』、『駆込み訴へ』、『誰も知らぬ』は、「走る」ことが作中で重要な意味を持つ作品であるが、特にこれら三つの作品を挙げたのは、昭和十五年という同年に発表されているということ、また、太宰の作家生活の中で、生活、作品ともに比較的安定していたとされる中期の作品であるということに興味を覚えたからである。

爆発的に膨れ上がる意志が、「走る」という行為によって表現されているこれらの作品であるが、その「走る」という行為が、性行為の代替行為としての役割を果たしていたかどうか、そこにエロスが潜む可能性があるかどうかを探ることは、実は太宰の心の内にエロティックな欲望が潜んでいるかを探ることもあった。

というのも、中期の太宰は、

かつて心中未遂の経験をもっていた太宰が、見合い結婚に踏み切ったという事実の背後には、おそらく「愛」にたいする考え方の微妙な変質が、太宰の年齢的成熟とともに潜在していたと推察できる。「愛」↓「死」というエロスの論理は、「愛」↓「忍耐と献身」というアガペ的な愛の理念に変質する。(中略)『走れメロス』に描かれている友情と信頼や、『駆込み訴へ』に見られるキリストのとらえ方やユダの心の振幅は、無償の愛の聖性への太宰の希求の深さを表している。

と評されているからである。つまり『走れメロス』や『駆込み訴へ』にエロスのものを見出そうとすることは、『愛』↓『忍耐と献身』というアガペ的な愛』に移行した太宰の心に、なお残っているエロスの欲望を追究するということなのである。しかし、メロスにせよ、ユダにせよ、いずれも、「走」った先に待つものは、「死」であった

のだから、『愛』↓『死』というエロスの論理」は内在していたのだと言えまいか。

岡三郎は、太宰文学の「走る」「歩く」「追い出す」「外へ出る」など、「空間移動を表す」一連の動詞に注目し、太宰の作品における「苦悩」の「文体的表出」をそこに見出した。⁽⁵⁾しかし、『走れメロス』『誰も知らぬ』『駆込み訴へ』などの「走る」行為は、対象に、「駆りたてられて離れる」⁽⁶⁾というよりは、むしろ対象に近づき、対象を得るための行為であつた。一見すると、キリストから逃げるために走つたかにみえるユダにしても、それは同様である。

三、多義的なエロティシズムのあり方

エロスの問題を語るうえで、男女の恋愛関係のほとんど描写されない『駆込み訴へ』『走れメロス』をなぜ題材にするかという点と、「走る」という行動に潜むエロティックな潜在意識に注目したからだけではなく、これら二作品における太宰治の「クイア」を指摘する論文が存在するからである。特に『走れメロス』については、

このテキストは、かくもホモセクシャルといわずともホモソーシアルであることは疑いない。ホモフォビアに向かわないホモソシアリテイ……。いやそもそも、太宰の小説に「男女」は登場するの⁽⁷⁾か。

と評されている。しかし、確かに『走れメロス』や『駆込み訴へ』の中に、「クイアネス」を認めたところで、太宰治が「クイアネス」だけを、つまり男性同志のエロティックな関係だけしか描くことができなかつたかという点、決してそうではない。なぜなら、『誰も知らぬ』にも『走れメロス』と似たエロティシズムが存在するからである。つまり、太宰作品に「クイアネス」が読み取れるのは、太宰が、『男女』は登場させなかつたからでなく、太宰の描く人物のエロスの対象が「拡大」⁽⁸⁾しているからに他ならない。また、「ひとと抱き合」うだとかという、行動のみ

ならず、思想的な面から、『走れメロス』に、もつと奥深い「クイア」を読み取ることまた、可能である。

『誰も知らぬ』には、『走れメロス』と同じようなかたちで、「走る」という行為に性行為の代替行為が見出される。また、そつと立つて、廊下へ出て小走りに走り、勝手口に出て下駄をつつかけ、それから、なりもふりもかまはず走りました。どういふ気持であつたのでせう。私は未だにわかりません。あの兄さんに追ひついて、死ぬまで離れまい、と覚悟してゐたのでした。芹川さんの事件なぞでんで問題でなかつたのです。ただ、兄さんに、もいちど逢ひたい、どんなことでもする、兄さんと二人なら、どこへでも行く、私をこのまま連れていつて逃げて下さい、私をめちやめちやにして下さいと私ひとりの思ひだけが、その夜ばかり、唐突に燃え上がつて、私は、暗い小路小路を、犬のやうに黙つて走つて、ときどき躓いてはよろけ、前を掻き合せてはまた無言で走りつづけ涙が湧いて出て、いま思ふと、なんだか地獄の底のやうな気持でございます。

もはや走ることと、感情の発露したのと、どちらが先かすら分らないほどに、主人公は突発的なエロスにおそわれている。このエロスは、主人公の側に、一方的に湧いたものであるから、ナルシズムといつてもかまわないであらう。ナルシズムの場合、追いかける対象は、自分を取り巻く全ての世界、ということになる。つまり、この時は、「兄さん」であつた対象は、別の存在とも置換可能なのである。

また、この部分の描写は、『走れメロス』と似通っていることが分かるだろう。「私」の感情の起伏によつて起こつた恋愛感情にも似た非連続的な心の描写と、セリヌンティウスという友人のために、走つたメロスの心の描写の共通点はどこであらうか。まず、双方とも、元来は、「友人」の為に走るべきであること。「芹川さんの事件なぞでんで問題でなかつた」という「私」と、「人の命も問題でないのだ」というメロスの符合。そして、「ほとんど呼吸ができないくらゐに、からだが苦しく」なつてまで、「何か」を求めて走り続けたこと。このように『誰も知らぬ』⁽⁹⁾という、

女性が主人公である作品と比べることで、太宰が、「クイア」だとすることは短絡的であること、しかし、確かに『走れメロス』という作品には、「クイア」が認められるということが明らかになる。

『駆込み訴へ』と『走れメロス』の間には、それぞれ種類の違ったエロティシズムの成立のプロセスが折り込まれている。この二つの作品の共通点は、先述したように、激しい感情の発露を表すのに、「走る」という行為が重要な役割を果たしている点である。ただし、『走れメロス』では、「走る」ことが感情にまで影響を与え、また走った後にも心境の変化が見られる。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救ふ為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。

と思っていたメロスが、「どうとも、勝手にするがよい。」と思うに至るのは、心情の変化というよりは、「走る」ことによる疲労という、肉体が要因となった感情の変化である。⁽¹⁰⁾しかし、「走る」ことがメロスに与えたのは感情の変化だけではない。それを乗り越えて、

間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走つてゐるのだ。

と思うに至ったメロスには、邪悪という感情を乗り越え、今まで知識としてすら知らなかった心情が芽生える。辛いから、裏切り者として生き延びるという思考は、今までメロスが選択していなかっただけで、あくまでも彼が既存の心情のうちのひとつとして蓄積していたデータである。しかし、本人にすら理解できない心情のためにメロスが動かされるとき、問題は根源的な方向からやってきているのである。つまり、ここでメロスには、「新しい水準のエロス」の「獲得」⁽¹¹⁾が起こっているのである。

それに対し、ユダのエロスは何を変えただけで変化はしていない。ユダの元来の欲望は、「あの人」に「ついて歩いて」「一緒」にいたいというエロスである。ユダの場合、「走る」ということの意味するものは、「あの人」を売り、ひいては、「殺」すためのものである。そして、「駄込」んだ後のユダの最終的な目標は、「今夜これから私とあの人と立派に肩を接して立ち並ぶ」こと、つまり「心中」することである。すると、形を変えただけで、ユダは「あの人」と「一緒」にいるという、「駄込」む前と変わらぬエロスを求めていたことがわかるだろう。

さて、ここで改めて、『走れメロス』を読み返すとき、その描写に実に様々なエロスが折り込まれていることがわかる。メロスに描写される多義的なエロティシズムについて、改めて読み解いてみたい。

先述の「新しい水準のエロス」の「獲得」という概念について書かれた論をここで引用しておこう。

ひもを巻き付けた糸巻きをベッドの向こうに投げては引っ張り出し、「いないーいた」遊びを繰り返す子供は、フロイトによれば、「母親が立ち去るのを、逆らわずに許すという衝動放棄」をなしとげているのである。つまりここでの子供は、その場かぎりの快感原則を押しやって、「いい子」でいて母親から愛されるために、泣かずに我慢するという現実原則を遊んでいるということだ。しかしフロイトから離れていえば、おそらく重要なのは、子供にとってこの「いないーいた」遊びが、以前の快感原則を代償するひとつの新しいエロス（＝遊び）として作り出されている、ということである。動物の快感原則から現実原則への移行行きが、ひとつの余儀ない道すじであるのに対して、この子供の現実原則の選択は、実は新しい「エロス」の体制を見出すという意味を持っている。子供が、「母親が立ち去るのを、逆らわずに許す」のは、単にそのことが生存のためにどうしても必要とされるからではない。子供はその行為によって「母親からより多く愛される（いい子であると承認される）ことを学ぶのであり、この場合、ひとつの直接的な快感原則の放棄は別の、より高次の快感原則の獲得

によって代替される。(中略) 人間は新しい水準のエロスを獲得するためには、必ずひとつの快感原則を断念しなくてはならない。言い換えると、ある「挫折」を受け入れなくてはならない。⁽¹²⁾

この「新しい水準のエロス」の「獲得」という概念は、『走れメロス』をエロティシズムという観念から読み解くうえで、重要なキーワードとなる。まず、『走れメロス』の冒頭は、何を示唆するのだろうか。

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。前出の論によると、「青年は、自分の内的な世界、理想やロマンの世界に住みつくとで」「自己中心性を守」ろうとするという。⁽¹³⁾ ここでいう「理想」は、思想の実現とも置換出来よう。「政治がわからぬ」メロスには、「庄政への反抗」⁽¹⁴⁾などという意識は、微塵もない。「庄政」ではなく、自分の「理想」を主張するためにメロスは王城に向いたのである。さらにつけ加えるのなら、その「理想」というのは、メロスの住む村では、「正義」として認められる思想であった。つまり、本来、メロスはどちらかというと「体制的」な人間なのである。⁽¹⁵⁾ それゆえに、「シラクス」という別の支配者が存在する町に来てしまったからには、「対立者」となり、「わからぬ」「政治」というものをせざるを得なくなってしまったのだ。

そもそも三日という期限をディオニスに認めさせるために、「人質」を差し出すことを提案することは、まぎれもない「政治」的な駆け引きである。⁽¹⁶⁾ というのも、「このごろは、臣下の心をも、お疑ひになり、少しく派手な暮しをしてゐる者には、人質ひとりづつ差し出すことを命じて居」という情報を老爺から事前に得ていたメロスは、逆にいえば、「人を、信ずる事が出来ぬ」ディオニスが、「人質」には交換条件として差し出すだけの価値を認めていることを知っていたからだ。

さて、ここで注目したいことは、「王様は、人を殺します」という事実メロスが、「激怒した」わけではないというである。王の行動を聞いて、「呆れた王だ。生かして置けぬ」と「懷中」に「短劍」を入れ、王城に向かうメロスは、殺人という「邪惡」よりも、「人を、信ずる事が出来ぬ」「邪惡」のほうに倒すべき価値を見出しているのである。このことは、メロスが目指しているものが、「邪惡」をなくすことではなく、自らの「理想」(言いかえるとメロスの住む村のイデオロギーの絶対化)の実現であるということを確認させる。

四、「同化」

『走れメロス』をメロスⅡ正義、王Ⅱ惡、という前提で読み、メロスの理想の実現が王の改心によって果たされたとする既存の論を否定し、メロスが王を理解し、改心したのだと指摘する論がある。

太宰がもくろんだメロスbは、決して王bに正義を見せつけ、セリメンティウスとの真実を明らかにするために走ったのではなかったのです。第一にメロスbは、自分を「まっばだか」にするために走ったのです。(中略)第二にメロスbは、全く期待もせずに待っていたへ人間不信に苦悩する王bと同化するために走ったのです。第三にメロスbは、へ人間不信に苦悩する王bと同様の視点を有して苦悩し続ける太宰自身の淡い願望のために走ったのです。そして最後にメロスbは、「まっばだか」になった自分を、人々の理解なき眼から「緋のマント」で隠すために走ったのです。

このように、メロスの側が、王の「苦悩」を理解し、王の世界に「同化する」ために走ったのだとするこの論は、既存の論の盲点をついていると言えよう。⁽¹⁷⁾

しかし、「同化」したのは、本当にメロスの側だけであろうか。「仲間に入れてくれ」というディオニスのことばは、ディオニス側からの歩み寄りの表れであろう。つまり、ディオニスはメロスを、メロスはディオニスを理解し、二人の住む領域に重なり合う空間が生じたことで、二人は「同化」をなし得たのだとは考えられまいか。先ほど、メロスは「走る」ことで、「新しいエロス」を「獲得」したと述べたが、ディオニスもまた、メロスに「真実」を見せられたことで「新しいエロス」を「獲得」したのである。

そもそも、ディオニスはこういった人物であつたのだろうか。それは、老爺のことばが物語っている。「王様は人を殺します」。「人を、信ずる事が出来ぬ」ディオニスのエロスは、人を痛めつけるサディストとしての方向へと向かう。サディストの方が心理的に劣等感を抱き、マゾヒストは心理的に優越感を抱いている。正確に言えば肉体的なサディストは、心理的にはマゾヒストであり、肉体的なマゾヒストは心理的にはサディストである。(中略)そしてサディストの快楽は直接的肉体的ではない。鞭打ち、傷つけることで相手が反応するのを見つめて、はじめて快感をおぼえる。とすればその願望の対象である肉体の持主に劣等感を⁽¹⁸⁾おぼえる。

例えば、「わしだつて、平和を望んでゐるのだが」とディオニスが言うとき、この「だが」という言葉に彼の「心理的」「劣等感」が表れていると言える。殺人は、ディオニスに精神的な痛手を与える。しかし彼は、対人関係において、「対立」することしか出来なかつた。その彼が、メロスとセリヌティウスの関係を見せられることで、「対立」とは別の人間との接し方を見出し、「新しいエロス」を形成する。これもまた、『走れメロス』に描かれているエロティシズムの一面である。

「同化する」という「性」のあり方は、大江健三郎が「我らの性の世界」で打ち出した「性的人間」のそれに近い。大江は、「性的な存在」を「政治的人間」と「性的人間」の二つに分けられるとし、「性的人間」は、全てのものに「同

化する」と言う。そして、その対象は、人間でなくとも、何であつても構わないという。⁽¹⁹⁾つまり、直接性行為の描かれない太宰作品のエロティックな側面を捉えようとするとき、拡大化した対象に「同化する」ことに、例えばメロスとディオニスの思想的「同化」にそういったものを見出すことが可能となるのである。また、大江の定義は、濫澤龍彦の述べる、「二元的に展開された生命の表現形式としての性」の二面性、「闘争原理」と「融和原理」⁽²⁰⁾に近い概念である。

そもそも、メロスとディオニスは、お互いに全てのものに対立するという「政治的人間」としての側面で向かい合っていた。メロスの「性」が「闘争原理」であつたことは、その特徴とメロスの行動を比較すると明らかである。例えば、ディオニスを「呆れた王だ。生かして置けぬ」と暗殺しようとするメロスは、「その倫理的ならびに精神生理的要請から、死刑その他の刑罰を肯定する立場に拠らざるを得ない」という、「闘争原理」の特徴を持っていたことが理解できる。

ここまで述べて来たように、『走れメロス』では、「走る」という性行為に変わる代替行為を経て、ディオニスとメロスが「同化する」ことでエロティシズムの成立が見られる。

しかし、メロスが「同化」したのは、ディオニスやセリヌンティウスにだけではない。メロスが、「なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走つ」た時、彼は、その「大きいもの」に「同化」するために「走る」ことで、快感を得ていたのではないか。それは、「わけのわからぬ大きな力」の引力に身を任せることでもあつた。では、「わけのわからぬ大きな力」とは何か。濫澤龍彦は、先に引用した論の中で、エロスについてこのように述べている。

両性を互いに牽引する力は、生殖本能よりも、エロティシズムよりも、じつはもっと大きな何物かの力（かりにエロスと呼んでおくが）の働きによるものであつて、それは失われた無差別、失われた絶対的一元性をふたたび

回復するための、ある解放への盲目的意志とでも呼ぶ以外に呼びようがないものではなからうか。⁽²²⁾

エロスという言葉を超えた「大きな何物かの力」。それこそが「大きいもの」の正体ではなからうか。

『走れメロス』は、「シラクス」という町に余所から来た「体制的」イデオロギーの持ち主が、その町の支配者と対立し、互いに理解し合うことで思想的に「同化」していく話である。そして、この作品の見直されるべき点は、たいていの小説では、片一方の側しか描かれない、「性」の「融和原理」と「闘争原理」⁽²³⁾を双方とも描いている点にある。

このように、エロティシズムの本質を、「まっぴらだか」になって体现してきたメロスという男に、ラストで「緋のマント」をささげ、隠蔽させることにより、「赤面」させ、それまで体现してきた行為を総括するものである素の肉体を恥ずかしいと思う認識を与えることを忘れなかった点に、改めて、太宰治の構成力の妙を思わずにはいられない。

本文の引用は、『太宰治全集4』筑摩書房一九九八・七刊、『太宰治全集10』筑摩書房一九九九・一刊に拠る。

注(1) 奥野健男「性文学の質的転換」(『文学界』一九六三・九、『奥野健男文学論集2』所収、一九七六・十、泰流社刊)によると、

『性』の本能は究極において『死』と融合する」とされ、奥野は、川端、犀星、谷崎などの「老人文学」に、『性』と『死』の対立がついに融合するさま」を見ている。

(2) G・バタイユ『エロティシズムの歴史』(一九八七・二、哲学書房刊)に、「われわれを消滅に向かって、死に向かって開く不安は、つねにエロティシズムに関係している」とある。

(3) 『太宰治全集4』「解題」参照。

(4) 磯田光一「太宰治小伝」(『女生徒』解説、一九五四・十、角川書店)。

- (5) 岡三郎「太宰治の文体——とくに苦悩^{アライ}の文体的表出として」(『国文学解釈と教材の研究』一九七四・二)。
- (6) 同右。
- (7) 北丸雄二「太宰治をクイアする」(『ユリイカ』一九九八・六)では、「同性愛という問題の数々の展開が向かうのは、友情という問題」というフーコーの説を援用し、「その『友情』に寄りそうようなものとしての教科書的なテキスト」として『走れメロス』を挙げている。
- (8) 磯田光一「性とそのタブー」(『新潮』一九八一・九、『戦後史の空間』一九八三・三、新潮社刊に所収)。本稿は、大江健三郎「われらの性の世界」が、「性の領域をはるかに拡大し」たとし、「エロティシズムの対象は異性に限定される必要はなく」、「政治的理想への殉教もまた『理想への合体』がエクスタシーを実現するという点で、優にエロティシズムの問題たりうる」とする磯田の論に、多大な影響を受けている。
- (9) 浜森太郎「勇者の誕生——『走れメロス』小論」(『人文論叢』一九八九・三)では、「メロスの力走は単なる『越境』の域を越えて、ほとんど『苦行』の意味を持つ事になる。つまり、メロスは、この『苦行』を通じて一層高揚し、純化しながら、終末の刑場の場面に立ち至るのである。」と述べている。
- (10) 田中実「ヘメタ・プロットへ——『走れメロス』」(『都留文科大学研究紀要』一九九三・三)に、「少なくともメロスが『悪い夢』から醒めて、再び疾走しようというとき、彼はそれまでの自己を克服して立ち上がったのではない。メロスが立ち上がったのは、肉体の生理上の変化であり、メロスもまたこのとき、『観念は生理に及ばない』という事実を生きていた」との指摘がある。
- (11) 竹田青嗣『エロスの世界像』(一九九七・三、講談社刊)参照。
- (12) 同右。
- (13) 注11に同じ。
- (14) 奥野健男『太宰治』(一九七三・三、文芸春秋刊)では、『走れメロス』には、「人間の信頼と友情の美しさ」「圧政への反抗」

が「表現されている」とするが、メロスは、「反抗」したのではなく、自己主張しただけであろう。

- (15) メロスが村のイデオロギーに従属した人間であることは、前掲浜森太郎論文に明らかである。浜は、メロスが、牧人としての「母系社会」の感覚で生きていたのに対し、「家庭」が「父」を中心」に営まれる社会に住むディオニスという二人の間のイデオロギーの差異があつたことを指摘している。

- (16) 政治的な駆け引きについて、戸松泉は、「へ走る」ことの意味——太宰治『走れメロス』を読む』（相模女子大学紀要）一九九六・三）の中で、『政治がわからぬ』という『政治』とは、眼前の王の既成の統治自体を指しているのではない。その時々他の者の動きを冷静に見詰めることからそれを決定していく駆け引きの仕方とでもいうものを指す。」と述べ、「政治がわからぬ」ということばは、「よくメロスを物語っている」とするが、「人質」を差し出したメロスは、まさにそういう意味で、「わからぬ」ながらも「政治」を行っていたのだと言える。

- (17) 花山聡『『走れメロス』考——メロスは誰のために走ったのか』（成蹊論叢）一九九二・一二）では、板垣信『太宰治』（清水書院センチャリーブックス、一九六六）、相馬正一『『走れメロス』の背景』（『太宰治』所収、津軽書房、一九七九）、東郷克美『『走れメロス』をめぐる』（『国文学解釈と教材の研究』一九六三・四）などを取りあげ、これらの論が、『メロス』正義、王Ⅱ悪という対立の構図から抜け出せないままに作品論がつくられている」と指摘している。

- (18) 注1に同じ。

- (19) 大江健三郎『我ら世界の世界』（『群像』一九五九・一二）。

- (20) 「エロス、性を超えるもの」（『朝日ジャーナル』一九六八・九、『濫澤龍彦全集』9）一九九四・二、河出書房新社に所収）。

- (21) 同右。

- (22) 注20に同じ。

- (23) 注20に同じ「多くの作家によって空想された性のユートピアは、とすると、この二つの原理の一方だけを描出する」とある。